

# 張愛玲『小團圓』における恋愛と結婚

——ヒロイン九莉を中心に——

鈴木基子

## I はじめに

『小團圓』は張愛玲が亡命後の米国生活中 1976 年に完成させた「自伝的小説」である<sup>1)</sup>。しかし、出版されたのは、逝去 14 年後の 2009 年であり、脱稿から出版まで、33 年の月日を要した<sup>2)</sup>。1976 年は米国亡命 21 年後で、カリフォルニア州ロサンゼルス市ハリウッドの 1825N. Kingsley Drive で夫亡き後、カリフォルニア大学バークレー校中国研究センター勤務を辞め、ひとり静かに執筆に専念していた時期にあたる。それまでの紆余曲折と波乱に満ちた人生を総決算するように 1975 年に一気に、この「自伝的小説」を執筆した。

1975 年 7 月 18 日には半分書き上げ、1975 年 9 月 18 日にはすでに書き終わり、12 月 21 日に修正中で、1976 年 3 月 14 日には約 18 万字の「大團圓」になった。1975 年 9 月 18 日と 10 月 16 日の書簡から、台湾と香港での同時新聞連載を望んでいたことが読みとれる<sup>3)</sup>。

なお、『小團圓』の先行研究は、大陸・台湾で数百本あり、非常に多い。王一心『〈小團圓〉対照記：张爱玲人际谱系』は、19 名の登場人物とモデルについて詳細に 230 頁に渡り分析している大作である。刘锋杰主编『小團圓的前世今生』は、伝記と小説内容を、モデル論、愛情、方言、外国文学、中国文学、隠喩、自伝小説などのテーマ別に特徴を分析する。高全之は『小團圓』の内容の虚実真偽を検討する。許子東は「晩期小説の男女関係」について「あなたの敵を愛すること」或いは「あなたの身内を敵視すること」が基本テーマであるという。王愛文は愛情、性、金銭から胡蘭成と張愛玲の恋を分析する<sup>4)</sup>。

1) 2009 年 3 月 28 日朝日新聞「アイリーン・チャン、台湾・香港でブーム再来」自伝的小説 30 年経て出版。http://book.asahi.com/clip/TKY200903280176.html?ref=rss.

2) 張愛玲は 1920 年生まれ。1940 年代中頃に『傳奇』『流言』で一世を風靡した。1952 年春に香港へ脱出し、一時香港大学で再び学び、それから USIA (United States Information Agency) 米国情報局で働いた。1944 年 2 月に胡蘭成と出会い、夏に法的に「正式でない結婚」である事実婚をし、1947 年 6 月に法的に「正式でない離婚」、事実婚の一方的解消をした。1955 年に亡命渡米し、Reyher と正式に国際結婚をし、1960 年 7 月に米国籍を取得した。1995 年 9 月にロサンゼルスで逝去する。享年 75 歳。

3) 宋以朗「〈小團圓〉前言」張愛玲『小團圓』張愛玲典藏 8、皇冠文化出版有限公司、2009 年 3 月初版 6 刷、P4—6。

4) 単行本としては王一心『〈小團圓〉対照記：张爱玲人际谱系』文匯出版社（上海）2009 年 11 月、刘锋杰主编『小團圓的前世今生』安徽文艺出版社、2009 年 9 月、などがある。論文では高全之「懺悔與虚實—〈小團圓〉的一種讀法」『張愛玲學續篇』麥田出版、2014 年 4 月、許子東「张爱玲晚期小说中的男女关系」『文学评论』2011 年第 2 期、p89—96、王愛文「从〈小團圓〉看“胡张之恋”」佳木斯大学社会科学学报 2012 年 10 月、Vol.30, No.5, p83—85 などがある。

日本人が書いた論文は寡聞にして現段階では検索できなかったが、池上貞子氏は書評で「自画像の完成」を志向するものと捉え、「公私にわたる事実や創作を含めて、これまで語られずにいた部分をすべて明らかにして、己の全体像を顕示したのではないかと考えるのである」という<sup>5)</sup>。

先行研究の傾向を受けて、本論は米国生活の影響を考慮しながら、張愛玲自身をモデルにしたヒロインの九莉が付き合う相手と共に時間的経過によって変化する「心の動き」を中心に検討し、九莉の恋愛と結婚の特徴を見出すことが目的である。なお、現在テキストは、台湾皇冠文化出版と、北京十月文艺出版があるが<sup>6)</sup>、ここでは、先に出版された台湾皇冠文化出版を底本とする。

## II 旧社会の恋愛・結婚と張愛玲の小説

### 1 旧社会の恋愛と結婚

小説の背景となる当時の中国の結婚は、伝統的旧式の請け負い婚（包辦婚姻）やお見合い婚と、新式「恋愛結婚」があったが、旧式結婚がほとんどを占めていた。「請け負い婚」（包辦婚姻）とは、父母もしくは家長が当事者の意志を確認せず、家柄のつり合いを重視して、結婚相手を決定する方法である。「恋愛結婚」は、当事者同士が自由に恋愛してから結婚するもので、20世紀初頭の新文化運動から出現してきた近代的な新しい結婚方法である。「お見合い結婚」は、紹介されてお見合いをした後に、当事者の拒否権があるものである。旧社会では、「一夫一婦多妾制」で宗族が大家族をなして、生活していた。正妻はひとりだが、妾が複数いる場合があり、妻妾同居であった。

家長は家産に頼って、大家族を維持し支える、絶大な権力を握っていた。三世代同居、四世代同居が理想とも言われていた。家父長制を背景にして男性が家長として一家を支配していたからである。「封建社会においては、下は家族から上は国家まで、家父長制をとっていた。家族の中では男性が家長として一家を支配していた。そして全権力を握る、すべての中心的存在となっていた。これが父権であり、夫権である」。だが、現実には、一部の裕福な家族が数世代同居を可能にし、あくまで理想であった<sup>7)</sup>。

張愛玲は、1920年生まれである。1920年以前に生まれた中国人の結婚は、親の取り決めによる「請け負い婚」が33.7%、お見合い結婚が63.0%、自由恋愛結婚が3.3%を占めたという<sup>8)</sup>。また、別な資料では、「かつては父母の命による旧式結婚が、1920年代では都市部で80%～90%、30年代では55%、40年代後半では51%を占めたが、農村部ではあいかわらずほぼ100%が旧式結婚をしていた<sup>9)</sup>とある。

5) 日本人が書いたものとしては、池上貞子「張愛玲の遺作『小團圓』の出版から」初出『東方』342号、2009年8月、p7—11がある。同文は池上貞子『張愛玲—愛と生と文学』東方書店、2011年3月、p345—357に所収。P349。

6) 張愛玲『小團圓』張愛玲典藏8、皇冠文化出版有限公司、2009年3月初版6刷。張愛玲『小團圓』張愛玲全集、北京十月文艺出版、2009年4月。以下、本論では皇冠文化出版の書籍（繁體字）を底本とし、張愛玲前掲書『小團圓』として明記する。

7) 潘允康・園田茂人監訳『変貌する中国の家族——血統社会の人間関係』岩波書店、1994年11月、p176—177、p179。

8) 表5—9「各年齢層の配偶者選択方式の比較(%)」蘇林『現代中国のジェンダー』明石書店、2005年12月、p123。蘇林が引く典拠は李銀河『中国婚姻家庭及其変遷』黒竜江人民出版社。

9) 白水紀子『中国女性の20世紀—近現代家父長制研究』明石書店、2001年4月、p242—243。白水紀子が引く典拠

張愛玲は都市上海に住み、名家でもあったので、封建的影響を強く受ける大家族の環境で生育していた。

1930年の国民党による新民法制定によってようやく当事者の合意による結婚が認められるようになるが、伝統的な考え方が根強く、法律的に可能であったとしても、新式結婚は至難の技で、まだ世間の偏見があった<sup>10)</sup>。

つまり、旧社会の中国において、中国男性は、結婚前も結婚後も、遊郭や娼館で比較的自由に「恋愛」を享受することが許されていたが、女性は、特に名家や上流階級では、婚前も婚后も貞操が求められる傾向があった。男性には「恋愛と結婚は別物」で、恋愛は家庭外で自由にするものであり、結婚は家同士の結びつきを重視し、恋愛感情を挟まないものであった。女性は名家であればあるほど、貞操が求められる、恋愛すらしにくい環境にあった。『小團圓』の背景には、このような旧社会の実態がある。

## 2 中国の『伝奇』と渡米後の『小團圓』

張愛玲には渡米前、上海で雑誌に発表したものをまとめた『伝奇』（1944年小説集）がある。池上貞子氏は「たしかに男と女の話が多いのであるが、そこには何か素直でないものがある。例えば、恋愛の話にしても、単純なハッピーエンドではないし、悲恋物語でもない」「ややグロテスクな男女模様が道徳的評価を加えることなく、そのものとして描かれる。それぞれ登場人物は人生に対して冷めていて、時には好悪的。不道徳といえど不道徳、人間も人間関係もどこかいびつだ」<sup>11)</sup>「反ロマンティズムとでも呼べばよいのだろうか」<sup>12)</sup>と述べる。

確かに初期小説はその傾向が強いようである。愛を求めながら、さまざまな障害に出会い、裏切られ自滅したり押しつぶされる女性を多く描き、男性へのあてこすりや皮肉が内包され、例え幸福を得たとしても、裏に何らかの犠牲が伴う気配に満ちてすっきりせず、悲しい辛い女性の運命がある。だが、渡米後の作品の『小團圓』は、張愛玲の初期小説の固定イメージを崩してくれる。

張愛玲が米国に渡ってからは、英語と中国語を駆使して、翻訳、シナリオ、研究、小説、エッセイなどさまざまなジャンルで文学活動に従事してきた。55歳で中国語で書いた『小團圓』は渡米前の作品と比較すると、作風とイメージの変更を迫るものであり、重要性があると思われる。

また、池上貞子氏は「『小團圓』では性描写も少なくなく、一（略）一九莉はまさに体をはっている、生身の女性であった」「今回の『小團圓』の出版は、生身の張愛玲の人間関係、とりわけ母親および胡蘭成それぞれに関する逸話に衝撃的な箇所が多いため、センセーションを巻き起こした感がある」<sup>13)</sup>という。『小團圓』には中国大陸で書いた『伝奇』やその他の作品に見られなかった過激な性描写が多くあり、内容も虚実入り交り、大胆で今までのイメージを覆される。なお性描写については今回は外し、稿を改めることにする。

は李銀河・馬憶南編『婚姻法修改論争』（光明日報出版社、1999年）p17。

<sup>10)</sup> 白水紀子前掲書『中国女性の20世紀——近現代家父長制研究』、p48。

<sup>11)</sup> 池上貞子前掲書「張愛玲 愛と生と文学」『張愛玲 愛と生と文学』、p12—13。

<sup>12)</sup> 池上貞子前掲書「張愛玲と胡蘭成 “漢奸” をめぐって」『張愛玲 愛と生と文学』、p30。

<sup>13)</sup> 池上貞子前掲書「張愛玲の遺作『小團圓』の出版から」『張愛玲 愛と生と文学』、p348、p352。

前期とは違うであろう後期小説の特徴を探るため、今回は、張愛玲のモデルである九莉の恋愛と結婚を中心に追跡し、今後の研究の一助としたい。

### Ⅲ 『小團圓』の出版背景とモデル

#### 1 出版背景

張愛玲は1975年10月に朱西寧から彼女の伝記を書きたいと言われて断り<sup>14)</sup>、1976年4月には夏志清から自伝を書くように注文されていた。ふたりの提案を受けたことがきっかけとなり、他人が書くよりも、自分で書きたいと言う強い意志があって、執筆を決意する<sup>15)</sup>。

『小團圓』は、1976年に完成していたが、その後、宋棋に修正を求められて、1993年3月には本人が焼却を希望していたが、1995年に亡くなるまで書き直しが行われていた。宋淇(1919—1996年、77歳)は、張愛玲の香港USIAの同僚かつ友人鄭文美(1919—2007年、88歳)の夫である。1949年に香港に移住し、香港中文大学翻訳センターで主任を務め、翻訳家、批評家、紅樓夢研究者として知られる。張愛玲の遺言を預かり、彼女が亡くなると、遺品は彼に届けられた。張愛玲が米国に渡ってから、著作の下読みをしては、アドバイスを与え、生涯に渡る交際をしていた。宋以朗は宋淇の息子で、ニューヨーク州立大学を卒業し、米国で30年生活し、2003年に香港に帰国し、「東南西北博客」zoniaeuropa.comを創立する翻訳家であり、張愛玲研究者でもある<sup>16)</sup>。

なぜ出版が順調にいかず宋棋に修正を求められることになってしまったのか。1976年4月28日の宋棋からの書簡から小説の初めの部分が乱雑で、初期の作品と重複する内容があること、張愛玲と漢奸の胡蘭成がモデルであることが想像され特定されてしまうこと、胡蘭成が時限爆弾のように危険で、好ましくないということが理由であった<sup>17)</sup>。よく知られたことだが、張愛玲は上海時代に汪兆銘政府の官僚であった胡蘭成と濃密な恋愛関係にあった。後に別れたものの、彼との関係が彼女の恋愛観に深い影を落としていた。そのことが「自伝的小説」に書き込まれて、政治問題化するのを編集者が恐れたのだろう。当時台湾の政治的情況をも考慮せねばならず、張愛玲の将来に対する影響を考えた宋淇は書き直しを指示したのであった。

また、皇冠文化出版の平鑫濤は次のことを提案していた。ひとつは、張愛玲が九莉のモデルと特定されないようにすること、ふたつめは、胡蘭成がモデルの邵之雍を地下工作者で、二重スパイであったという設定にし、九莉が彼に幻滅するのが彼の政治的立場や振る舞いではなく、彼がふたりの妻を持つことが理由であるように書き換えること、日本人の登場人物荒木を削除することなどである。

特に、当時胡蘭成が台湾にいたので、警戒する必要がある。その上、張愛玲としては台湾で出版さ

14) 1975年10月16日書簡、宋以朗「<小團圓>前言」張愛玲前掲書『小團圓』、p5.

15) 1976年4月4日書簡、宋以朗「<小團圓>前言」張愛玲前掲書『小團圓』、p8.

16) 維基百科を部分参照。宋以朗(1949—)。http://zh.m.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%8B%E4%BB%A5%E6%9C%97 & 『張愛玲私語録』皇冠文化出版、2010年7月の表紙裏。

17) 宋以朗「<小團圓>前言」張愛玲前掲書『小團圓』、p11—12.

れる久しぶりの作品であり、彼女にとって文壇でのターニングポイント（転換点）となる作品なので慎重に事を運ばねばならないと平鑫濤は考えていた<sup>18)</sup>。作品が自伝的内容を持つだけに、過去の交際相手、政治背景、文壇の状況、張愛玲の将来への憂慮などの面で細かい配慮が必要だと彼らは考えたのである。以上のようなやりとりと書き直しの作業が行われたにも関わらず、張愛玲の生前に出版されることはなく、『小團圓』は没後の2009年3月に台湾皇冠文化出版から出版された。それが基づいたのは年月をかけて張愛玲が修正を加えた原稿ではなく、宋棋の息子の宋以朗に引き継がれた1976年の執筆当時の原稿であったという。90年代から2000年代にかけての台湾の出版環境の変化によるもの、モデルとなった関係者がこの世を去ったこと、オリジナルの方が売れるという出版社の判断、等理由が考えられる。現在の読者にとっては、オリジナルを読めることは幸運といえるが、同時に、完成度が低いという印象も受ける。

## 2 『小團圓』の主要登場人物の人名と実名モデルとつながり

小説の登場人物と実在のモデルとの対応について見てみる。

表1 『小團圓』の主要登場人物の人名とモデルとつながり生没年の一覧<sup>19)</sup>

人名	モデル	備考	生年—没年, 享年
盛乃德（二叔） Ned, Edward	張廷重, 張志沂	張愛玲の父親（盛家）	1896 — 1953年, 57歳
卞蕊秋（二嬢） Rachel	黃逸梵, 黃素瑩	張愛玲の母親（卞家から盛家へ嫁入）	1893 — 1957年, 64歳
盛九莉 Julie	張愛玲	張愛玲本人（盛家）	1920 — 1995年, 75歳
盛九林 Julian	張子靜	張愛玲の弟（盛家）	1921 — 1997年, 76歳
耿翠華（耿十一小姐）	孫用蕃	父乃德の後妻, 張愛玲の継母	
奶奶	李菊耦	祖母（竺家から盛家へ嫁入）	1866 — 1912年, 46歳
爺爺	張佩綸	祖父（盛家）	1848 — 1903年, 55歳
大爺	張志潛	盛乃德の異父兄, 張佩綸の先妻の子, 九莉の伯父	
盛楚娣（三姑） Trudy	張茂淵	父乃德の妹（盛家）, 李鴻章の外孫	1901 — 1991年, 90歳
表大爺	李國潔	李鴻章の内孫, 次男李經述の子（竺家）	1881 — 1939年, 58歳
三姨奶奶	※	表大爺の妾	
表大媽	※	表大爺の後妻（竺家）	
緒哥哥	李開第	表大爺 & 三姨奶奶の女中の子ども（竺家）	1902 — 1999年, 97歳

18) 1976年4月28日書簡, 宋以朗「<小團圓>前言」張愛玲前掲書『小團圓』, p10—14.

19) 王一心『<小團圓>対照記: 張愛玲人际譜系』, 劉鋒杰主編『小團圓的前世今生』, 「小團圓的主要人物关系」百度文库 <http://wenku.baidu.com/view/b31bf06da98271fe910ef912.html>, [美] 李黎著『張愛玲・未了情』江苏文艺出版社, 2011年3月, p138—139. などを参照した.

研究紀要 第76号

維嫂嫂	※	緒哥哥の不倫相手、維哥哥と結婚	
卞雲志	黃定柱	母黃逸梵の弟（卞家）	
邵之雍 John or Jerome	胡蘭成	初婚相手、事実婚、羌族	1906 — 1981年, 75歳
汝狄 Rudy or Rudie	賴雅, Reyher	米国国際結婚相手、ライヤ、ドイツ系、劇作家	1891 — 1967年, 76歳
燕山 Janson	桑孤	小説では俳優だが、実際は映画監督、劇作家	1916 — 2004年, 88歳
比比 Bibi or Beebe	炎櫻, Fatima	香港の大学での親友、セイロンと中国のハーフ	
小康小姐	周訓德	胡蘭成の華中の愛人、看護師	
郁先生	※	胡蘭成の友人、郁太太と結婚	
辛巧玉	范秀美	胡蘭成の愛人、養蚕技師、郁先生の父の妾	
陳瑤鳳	邵之雍夫人	胡蘭成の子、精神病、のち離婚	
章緋雯	應瑛娣	胡蘭成の子、歌姫、のち離婚	
文姬	蘇青	小説内では編集者、現実には作家	1914 — 1982年, 68歳
荀樺	柯靈	小説内では編集者の文化局、現実には劇作家、映画評論家	1909 — 2000年, 91歳
焦利	※	楚娣の同僚でハーフ	
荒木	池田篤紀	日本人	
韓媽	何千	九莉の乳母、安徽合肥出身、童養媳	
來喜	※	女中、大爺の妾、のち結婚	
碧桃	※	女中、母蕊秋の嫁入りに伴い盛家へ来る。南京出身	
余媽	張千	弟九林の乳母、女中、母蕊秋の嫁入りに伴い盛家へ来る。南京出身	
李媽	※	女中、乳母	
毓恒	※	下男、母蕊秋の嫁入りに伴い盛家へ来る。南京出身	
鄧升	※	下男、書齋で使う盛家の召使、安徽合肥出身	
安竹斯 Andrews	※	香港の大学の教員、九莉に個人奨学金	
雷克	※	香港の大学の教員、病理学の助教	
特瑞絲嬷嬷 Mother Terese	※	香港の大学のシスター	
亨利嬷嬷 Mother Henry	※	香港の大学のシスター	
劍妮 Jenny	※	香港の大学の友人、魏先生の愛人	
茹璧 Ruby	※	香港の大学の友人、汪精衛のめい	
賽梨 Sally	※	香港の大学の友人	
婀娜 Audrey	※	香港の大学の友人	
愛老三	※	父盛乃徳の愛人、妾	

小老七	※	父盛乃徳の愛人愛老三の娘	
畢大使	※	項八小姐と再婚	
項八小姐	※	蕊秋の友人，畢大使と再婚	
簡煒	※	蕊秋の恋人，楚娣との三角関係の相手	
南西夫婦	※	蕊秋の友人，パリでチャーリーと国際結婚	
馬壽	※	蕊秋の恋人	
勞以德	※	蕊秋の恋人，シンガポールで戦死	
誠大姪姪	※	蕊秋の恋人	
布丹大佐	※	蕊秋の恋人	
菲力	※	蕊秋の恋人	
范斯坦醫生	※	蕊秋の恋人，九莉の病気を治療	

※はモデルが特定できない。香港の大学とは小説内ではヴィクトリア大学のことで、現実には香港大學。

ヒロイン盛九莉（張愛玲）の父は盛乃徳（張廷重），母は卞蕊秋（黃逸梵），弟は盛九林（張子靜）である。父の父，つまりヒロインの祖父爺爺（張佩綸）は清朝の名臣がモデルで，父は後妻奶奶（李菊耦）の息子で，妹が盛楚娣（張茂淵），先妻の息子は老爺（張志潛）である。

ヒロイン九莉の祖母である奶奶（李菊耦）の父は李鴻章がモデルで，李鴻章の次男李經述がモデルの長男が表老爺（李國潔）で，その妻が表大媽，表老爺と三姨奶奶の女中の子どもが緒哥哥である。ヒロイン九莉は，邵之雍（胡蘭成），燕山（桑孤），汝狄（賴雅，Reyher）と付き合い，邵之雍は，陳瑤鳳，章緋雯（應瑛娣），九莉を「妻」としたほか，小康小姐（周訓徳），辛巧玉（范秀美），文姬（蘇青）などと関係があった。関連総登場人物は百名近くになる。

### 3 『小團圓』のモデルと時代背景

張愛玲は1920年9月上海に生まれ，1955年秋に米国に亡命し，1995年9月に75歳で亡くなった。登場人物のモデルは，祖父母，両親，弟，張愛玲自身と伴侶，おば，おじ，その他の親戚，友人たちであり，1920年から1950年初頭の頃，前近代と近代の過渡期が作品の舞台となっている。張愛玲の父方がモデルとなるのが「盛家」，母方が「卞家」，祖母の実家が「竺家」で清末の政治家李鴻章（1823—1901年）を出した家柄である。『小團圓』はヒロイン九莉の成長と恋愛遍歴の物語だが，「盛家」，「卞家」と「竺家」の3つの家系の家族史として読むこともできる。

作品には，幼少時の家族を取り巻く生活，香港のヴィクトリア大学での学生生活，校友との関わり，父母の不仲，弟の存在，おばとのふれあい，離婚後の父母との関わり，父の再婚，おばの恋愛，自らの執筆生活，同性愛，恋愛，婚前交渉，初恋，結婚，離婚，妊娠，中絶，再婚など，九莉を中心に多くのエピソードが描かれるが，中心的なテーマは九莉や周辺の登場人物の恋愛と結婚であると言って間違いないだろう。私自身が最も興味を魅かれたのは，人間と時代，時代に翻弄されながらも生き延びる女性たちである。

表1にある通り主人公の九莉は張愛玲をモデルとし、邵之雍は胡蘭成をモデルとする。実在の胡蘭成同様に、邵之雍は対日協力者として描かれる。当時は、戦争の時代であった。1932年満州国建国、1937年日中戦争、1941年太平洋戦争、そして国共内戦、1949年中華人民共和国誕生と、激動する世界史と中国史を時代背景として、『小團圓』は張愛玲と周辺人物との実体験を含めて、虚実取り混ぜて男女の愛情のさまざまな類型を提示している。

物語の内容について、張愛玲自身は1976年1月25日の宋棋宛ての書簡で「『小團圓』は筋が複雑でドラマチックであり、刺激に富んでいる、愛情物語であって、紙上の論争の白書ではありません。作品の中の胡蘭成への愛憎も、後になって感じたものと違います」<sup>20)</sup>と述べている。おそらく、『小團圓』で書かれた胡蘭成のモデルの邵之雍への熱愛と未練に満ちた描写は、現実の経験とは異なっているということであろう。

当然のことながら、「自伝的小説」はあくまで「自伝的」なのであり、回顧して書くという行為に、作者の一定の価値判断がすでに加えられている。張愛玲は名家に生まれて伝統的な教育を受けると同時に、西洋近代の教養も身に付けた。恋愛や結婚に関する価値観もその双方の影響を受けている。作品中の九莉も同様である。さらに、作品が書かれたのは、張愛玲が36年間暮らした中国大陆を離れ、米国に渡ってから約20年後の1975年であり、米国での経験が小説に反映されているであろうことも考慮に入れなければならない。また、この作品が中国語で書かれた、すなわち中国人読者を想定して書かれたことにも注意を払う必要がある。

## IV 九莉の恋愛と結婚

### 1 九莉と邵之雍

#### 1.1 出会いと事実婚

ふたりは、邵之雍が九莉の小説の書評を書き、ほどなく邵之雍が編集人の文姫に九莉の住所を聞いて訪ねて来たところで出会う。お互い一目ぼれで、共に魅かれあうものがあり、それから邵之雍が毎日九莉を訪ねて来るようになる。九莉にとって邵之雍は初恋の相手であった。九莉が「22歳になって恋愛物語を書いているが、これまで恋愛したことがないなんて、人に知られたらまずい」<sup>21)</sup>と述べている。九莉は邵之雍との初対面の印象を「中世ヨーロッパに流行していた恋愛のように絶望的」で「彼女は目的のない愛だけが本物だとずっと信じていた」<sup>22)</sup>。中世ヨーロッパでは婚前は貞操を守り、結婚してから恋愛するのが普通で、家庭を壊さなければ、外での自由恋愛が男女ともに公認されていたらしい<sup>23)</sup>。邵之雍は妻子持ちだったのだ。正妻は亡くなっていたが、息子がいて、法律上の正妻である陳瑤鳳は精神

20) 宋以朗「〈小團圓〉前言」張愛玲前掲書『小團圓』、p6.

21) 張愛玲前掲書『小團圓』、p162.

22) 張愛玲前掲書『小團圓』、p165.

23) 山田昌弘『近代家族のゆくえ—家族と愛情のパラドックス』新曜社、1994年5月初版、2005年2月初版8刷、p124—125.



病を病み子どもがいて、さらにもう一人 20 数歳の妻、歌姫の章緋雯がいた。

初めてふたりがキスをした時に、九莉は「この人は本当に私を愛しているんだわ」<sup>24)</sup>と感じていた。これは小説「色，戒」の王佳芝にもみられる表現である。九莉は子どもの頃、母とおばが英語で歌っていた歌を思い出した。ふたりは素晴らしい時を過ごし、「金色の夢の河」で舟を漕いでいるようだが、いつでも陸に上がって恋愛を終わらせ、夢から現実に戻れると感じていた。彼に「僕たちには前途がない」と言われたが、彼が友人に出す手紙に「僕は九莉と恋愛している」と書いているのを知ると、九莉は声に出さずとも、嬉しいのである。九莉にとって邵之雍が恋愛を正面から認めて、周囲に宣伝してくれることが嬉しかった。

ふたりとも悩みを深めた時期があった。邵之雍は「僕は恋愛は嫌いだ。結婚が好きだ」「君に決めたよ！」<sup>25)</sup>と彼女の方に顔をうずめて言うが、九莉は離婚しなくてどうして結婚できるのかわからなかった。離婚するにはお金が必要だったのである。九莉は彼に『聊齋志異』の狐女みたいと言われたこともあった。それは愛人の比喩である。

邵之雍は、仕事でしばしば南京と上海を往復し、上海にいる時にほとんど毎日九莉に会いに来る一種の「通い婚」であった。「本当なんだ、ふたり（の関係）は本物だ」と邵之雍は言う。九莉は、「過去の人、過去になろうとする人に嫉妬しない」し、妾になるのは絶対に嫌であった。養育費の件がようやく解決し、邵之雍が陳瑤鳳と章緋雯との離婚を新聞に掲載して、離婚が成立して、九莉の願う「恋愛結婚」が実現する方向に向かう。

ふたりは結婚の証として結婚証明書（原文「婚書」）を作成する。九莉はひとりで結婚証明書を買に行き、店員が何も言わなかったので、1枚だけ購入してきたのであった。あとで2枚必要だったと邵之雍に言われて気づくが、遠くて疲れたのでもう一枚を買に行けなかった。「邵之雍と盛九莉は生涯夫婦となることに署名する。ふたりの過ごす年月が穏やかで、現世は平穩無事でありますように」と毛筆で書き、サインした。正式には2部作成してそれぞれが保存するもので、証人も必要であったが<sup>26)</sup>、二人は一部しか作成せず、証人の署名もなかった。「彼女（九莉）は彼（邵之雍）がどんな感想をもつか考えたくもなかった。——もちろん正式ではない結び付きであり、女性側に証拠とするものだ」<sup>27)</sup>ということから、法的には正式でない結婚だが、「通い婚」で事実婚に該当したと言えるであろう。法的に有効な結婚は望んでいなかったが、結婚はしたかったのである。実質的に結婚したが、法的には認められない、愛を重視した制度という枠にはまらない結婚形式であった。

## 1.2 小康小姐の出現と終戦

邵之雍は華中で新聞社を経営し、新聞を発行し、文芸月刊も創刊していた。邵之雍は華中に行ってか

24) 張愛玲前掲書『小團圓』, P167.

25) 張愛玲前掲書『小團圓』, p176.

26) 滋賀秀三『中国家族法の原理』創文社, 1967年3月第1刷, 2009年2月第6刷, p469—470, p473.

27) 張愛玲前掲書『小團圓』, p253.

ら初めての手紙で、小康小姐のことを打ち明けた。彼は新聞社の宿舎となっていた病院に暮らしていた16歳の看護師と親密になったのである。「私が一番嫉妬する女性です。でもあなたがそこでの生活があまり無味乾燥でないのが嬉しいわ」と九莉は返信する。九莉は、彼の「博愛」的な女性関係に対して、理性的に対応し、ある程度の理解を示す。だが、同時に、緋雯や文姫に対しては感じなかった嫉妬心を、ただ小康小姐に対しては抱く。小康小姐は若くて美しく、性的魅力を備え、看護師をしていて、気配りができる女性であった。

だいぶ後で邵之雍に小康小姐の写真を見せてもらおうと「丸まるとした頬、湾曲して笑った眼、少々吊り上がった目尻。一（略）一胸が豊満であることは見てわかる。頭髮は長くなく、内側に巻いている。母の心の中の少女より少々ふくよか」<sup>28)</sup> だった。

彼女は爆撃の時に防空壕で身を挺して邵之雍を守る様子を見せていた。「はかりごとをし、手練手管を弄する女の子。わずか17, 8歳だけでも、早熟ですでに外でかなり経験を積んできた。内地で旧習を守るなんて彼女にはありえないわ」<sup>29)</sup> と九莉は評する。小康小姐は、九莉が持っていない魅力を備えて、邵之雍の現実生活に貢献していたことに、九莉は嫉妬を感じたのであろう。章緋雯も15歳で嫁いできた美人の歌姫で、父親代わりの存在だった。小康小姐の出現により、ふたりの関係が変化し距離が生まれる。邵之雍は華中に来るように九莉を誘うが、九莉は内地が危険であることと交通手段の問題から思いとどまらざるを得ない。軍用飛行機に乗るのは家族である必要があり、「家族は妾の代名詞」<sup>30)</sup> であった。

九莉は「もし邵之雍を引き留めておきたいなら、彼の言うことに従わなければならない。従うとどんなに辛くても」と思う。邵之雍は「正式な結婚は離婚できるが、非正式なものはさらに別れにくい」<sup>31)</sup> と言ったことがあるし、年の離れた「若い女性が大好きで、年取ったのは嫌い」と公言し、どこでも女性の影が絶えない。男性中心主義であった。「妻」九莉は、「夫」邵之雍の不貞行為を傍観して耐え忍ぶしかなかった。

九莉が物心ついてから、戦争は常に日常生活の一部であった。「九莉は永遠に戦争が続くことを願っていた。なぜなら、あなたとずっと一緒にいられるから」と思っていた。上海戦を2回経験し、香港では校友と戦争について語りあった時に「私は非常に楽しい」と言っていた。

第二次世界大戦が終わろうとする頃、九莉は「失落の一年」を過ごしており、翻訳はするが、小説は書けないうちにいた。1945年の終戦後、対日協力者であったため漢奸（売国奴）とされた邵之雍は、身を隠す必要に迫られる。この危急の際に邵之雍は「(君は) やはり愛人だ。妻ではない」と本音を吐露する。そして九莉が尋ねると「4年待っててくれ」と九莉に告げて、田舎に逃亡する。

邵之雍は左傳を見せて、斎の桓公が王子の時トラブルを起こして逃走した際、彼の許嫁は彼を25年

28) 張愛玲前掲書『小團圓』, p304.

29) 張愛玲前掲書『小團圓』, p254.

30) 張愛玲前掲書『小團圓』, p233.

31) 張愛玲前掲書『小團圓』, p305.

待ったと説くが、九莉は25年待ったら年とってしまうし、永遠に待つと言われたほうが良いと思う<sup>32)</sup>。

九莉は、香港の大学に戻れるのか、或いは英国の大学へ留学できるのか、その上年齢や、奨学金のこと、小説を書くことなど、将来について心配して悩みを深める。一方、周囲の人々は九莉のことを「漢奸妻」（売国奴の妻）と陰口をたたき、上海の街が戦争勝利の祝賀パレードで湧く中、九莉は世界の潮流に逆らうように孤独だった。両親が離婚していたし、父は留学費用を出してくれず、あげくの果てには監禁されたし、母が教育費生活費を負担してくれていたが、外国へ行ってしまっていたので、「母にお金を返さねば」と何度も強い思いに駆られ、八方ふさがりの境遇であった。

### 1.3 辛巧玉の存在と別れ

邵之雍が内地へ逃亡してから、まもなく2年が経過しようとしていた。疲労困憊していた九莉は、郁先生に彼に会いに連れて行ってもらう。彼の逃亡先の小都市に行ってみると「夫」邵之雍は南京からの逃避行に同行した30数歳の辛巧玉、更には日本人女性とも深い関係が発生していた。邵之雍が又もや自ら、九莉に女性関係を告白するのであった。邵之雍は「僕の欠点は永遠にうぬぼれることだ」「君も彼女に嫉妬すればいい」<sup>33)</sup>とまた、ぬけぬけと開き直った言動をとる。

辛巧玉は郁先生の父の妾であり、一男一女に恵まれ、郁先生の父が亡き後は、養蚕技師として、養蚕学校を経営していた能力のある女性である。辛巧玉に対して、九莉は、彼の保護色で唯一の慰めであるので、気にしていない。

九莉はその場限りの「仮初の夫婦関係」としては認める態度で理解を示すが、内心は衝撃を受ける。それ以降、九莉は長い手紙を書くことはなく、折に触れ事務的にメモを書いて送るだけになった。

邵之雍の女性観は「良い歯をなぜ抜かねばならないんだ？選ぶのは良くない」という言葉に顕著に表れていると言えよう。女性を歯に譬え、ひとりに絞りたいくないという意味である。「これまでどんな人も捨てなかったし、同性の友人も含めて人は彼の活動の資本なのである」<sup>34)</sup>。九莉は「詭弁、狂人のロジック」と感じて失望し、本気で「彼女（小康小姐）と別れないと去る」といっても、邵之雍は信じてくれない。

邵之雍が内地へ逃亡して去った。九莉は邵之雍をまだ待っているのかと聞かれて、「彼は去った、彼が去ってすべて終わったわ」と答える。もはや、邵之雍が自分を愛していないことを確信して、九莉は見切りをつけて、シナリオを売って彼に送金して別れを告げ、ふたりの関係は終わる。彼が一人だけを愛せず、自由を謳歌しながら花から花へ飛び回るのは、プレーボーイ（遊び人）の行動原理であり、多妻主義で重婚主義者なのである。九莉は一对一の相思相愛を求めていた。事実婚は、女性からの一方的放棄によって解消され、法的に正式でない離婚をしたのである。九莉の理想と邵之雍の実態が異なり、破局したのである。

32) 張愛玲前掲書『小團圓』, p273.

33) 張愛玲前掲書『小團圓』, p278.

34) 張愛玲前掲書『小團圓』, p307.

邵之雍と別れた後も、九莉は時に訳も分からずに苦しさが胸に込み上げてくる。作品は30歳になった1950年と1955年頃の九莉を描いて終わるが、見た米国映画から連想して、松林から九莉の子どもたちがたくさん出てきて、邵之雍が微笑して、彼女を山小屋へ連れて行く夢の場面が描かれる。その夢を九莉は否定せず、嬉しさを感じているのである。20年前の映画、10年前の人、九莉は夢から目覚めた後、長い間、満ち足りた余韻に浸る<sup>35)</sup>。邵之雍への愛の炎は消えることなく、心の奥底に眠り続けていたのである。九莉は心がすれ違って別れたが、ずっと愛していたのだ。

## 2 九莉と燕山、汝狄

燕山はハンサムな俳優である。映画会社が九莉の小説を映画にしようとしていて、社長が九莉に紹介した人たちの中にいたひとりであった。お互い一目ぼれというわけではなく、九莉にとっては、ほとんど彼でなくてもよかったのだが、交際を深めていった。「ほとんど彼である必要はなかったが、ただ一筋の恋の夢が顔をかすめることだけが必要で、それであたかもまだこの世にいるようであった」<sup>36)</sup>。

九莉は小さい時映画を見ていて、人が出てくるとすぐに尋ねた。「この人、良い人なの？それとも悪い人？」燕山は九莉に「あなたは結局、良い人なの？悪い人なの？」と尋ねる。勿論、彼が九莉と邵之雍の関係のことを聞いているとわかっている。

九莉が燕山と知り合い付き合い始めた頃、まだ邵之雍との関係は完全には終わっていなかった。邵之雍の方が、まだ九莉に未練があり、関係を解消する気がなかったのだ。そのため、「ふたつの世界」がぶつかりそうになったことがあり、ひと悶着あった。邵之雍が家にいる時に、燕山からの電話を受けて怪しまれた時のことである。その後、邵之雍は九莉の机の中や引き出しをひっくり返し、書きかけの長編小説の原稿を読み「この中に全く僕がいない」と怒る<sup>37)</sup>。邵之雍は内地へ行ってからも、九莉に永遠に愛している旨の手紙を出してきたが、受取先は親友の比比であり、九莉は見向きもしなかった。

九莉は燕山との交際に、「初恋の埋め合わせ」のような感覚を感じていた。それでいて、九莉はずっと美男子を疑い、美男子は心理に不正常なところがあると感じていた。「(九莉の)産毛一本も彼(邵之雍)に触れさせたくない」と燕山に言われたかと思うと、「あなたは大体年上の方が好きなんだ」と彼に見抜かれてもいた。楚娣は中立的な大人の女性の目で、「あなた(九莉)は邵之雍が相手の時とは違う」<sup>38)</sup>と看破し、ふたりの交際に「ほとんど何の価値も認めない口ぶり」であった。

それでもふたりは、交際を重ねて、「私のようにあなたが好きな人はいないわ」と言い、お互い愛し合っていると思っていた。ある日、九莉が自分は妊娠したと思い燕山に告げ、広東人医師を紹介された時、燕山は世間にふたりの関係を公表しようと言っていたが、九莉の悪名が広がっていた時期でもあった。診察の結果、妊娠ではなくて子宮頸管裂傷が判明した。それは邵之雍の激しい性行為が原因であった。

35) 『小團圓』は1975年の執筆なので、20年前は1955年を指し、正に渡米した年である。「10年前の人」は1965年を指すが、1967年に亡くなった米国人の夫、Reyherを指すと思われる。

36) 張愛玲前掲書『小團圓』、p284—285。

37) 張愛玲前掲書『小團圓』、p301、p306—307。

38) 張愛玲前掲書『小團圓』、p315。

「心では、彼に彼女（九莉）がぼろぼろのぬれ落ち葉どころか、蹂躪されて不具になった、と思わせたかった」<sup>39)</sup> ので、九莉は医師の口から燕山の耳に入る前に、自ら伝えたのであった。燕山は無表情で聞いていたが、それから連絡が途絶え、九莉に何にも告げずに、彼は雪艷秋と結婚してしまった。九莉は振られたのである。

ひたすら男性からの連絡を待つ九莉の姿は、古風で内気な令嬢の心理の反映であろう。九莉は失恋し「彼女は心が焼き焦がれるよう。もしかしたら性格が生まれつきひねくれているのかもしれない。彼女はこれまで邵之雍が別の女性と一緒にいることを想像できなかった」<sup>40)</sup> と思ったのだ。九莉の燕山との愛は「真の愛」ではなく、錯覚であった、邵之雍の代償であったということが、燕山に振られて初めて後々自覚できた。燕山は九莉を見透かして、彼女の身体の傷が契機となって破談が決定づけられた。ここでも九莉と燕山の意識の行き違いが判明している。邵之雍に痛めつけられた九莉が燕山に慰められたが、表面は燕山を愛していると思っていたが、実際は邵之雍を深く愛していたのがわかってしまい、燕山との交際は「初恋の埋め合わせ」であった。

かなり年月が経った後、九莉は米国にいた。盛九莉は渡米先で汝狄と知り合い結婚したのであるが、『小團圓』にはふたりの出会いや恋愛過程は詳しく記載されていない。汝狄は邵之雍同様、年齢が九莉よりかなり年上で、文筆業である点が共通している。汝狄は、元ハリウッドで活躍した劇作家で、「気骨のない男」と自ら認める。汝狄の性格と生活力のなさ、それに盛九莉が彼との間に授かった4か月の胎児を、自らの意思によって墮胎する様子が克明に描かれている。

米国人の夫汝狄が産んでもいいと言っていたが、九莉は、「要らない。一番好い状況でも欲しいと思わないわ。——お金もあり、連れ添う頼れる人がいても」と言う。墮胎児は男の子であった。九莉は子どもよりも、経済的なものよりも、心が通じ合い共通の話題のある米国人夫との静かで双方が求め合う強い愛の生活を最優先に考えて、彼と結婚したのである。渡米後の不安な時期のタイミングならでの縁の巡り合わせであろうか。

九莉の恋愛と結婚の相手のタイプは、自分よりも年上で美男子でなく、経済力を求めず、文学が理解できて、心が通じ合い一対一の愛し合う関係が実現できる人である。「愛さえあれば」「形式にこだわらない」純愛志向で、何よりも心に存在する愛を重視しており、打算が存在していない。

### 3 九莉の性格

#### 3.1 母蕊秋と「夫」邵之雍から二重の傷害

九莉の性格を見てみると、普通の人とは感受性が異なることが多いことがわかる。たとえば、両親が離婚して家に科学者が出たように近代化したことが得意だったり、仲良しだった笠家の純姐姐が骨結核で亡くなっても何も感じなかったり、五爸爸や緒哥哥に好かれても彼女は彼らが嫌いだったり、乳母の韓媽との別れに涙が出なかったり、戦争が楽しかったり、漢奸を好きになったり、子どもが要らなくて、

39) 張愛玲前掲書『小團圓』, p319.

40) 張愛玲前掲書『小團圓』, p322.

墮胎後に結婚したことなどである。親友の比比は、九莉について「少しも母性本能の手腕もない！」<sup>41)</sup>と判断する。九莉の性格は、謙虚で内気、心で思っても表現が苦手な口下手であった。楽しくない幼年期が九莉にこのような行動と心理をもたらす原因となっていると考える読者はごく少数であろう。そのため、1976年4月28日の書簡で宋淇に、九莉が「型にはまらない」「同情されない性格の人」であることを指摘されていた<sup>42)</sup>。

小説に「感傷というものには程遠く、抵抗力が強い」<sup>43)</sup>のは、「最も好奇心を嫌う」<sup>44)</sup>とあるように、九莉が母に小さい時から訓練されてきたからであろう。大家族で暮らしていたが、プライバシーを重視する西洋思想を持つ環境が、九莉の独特の個性を創り出していた。「事實は彼女の母と邵之雍だけが彼女をひどい目に遭わせたのである」<sup>45)</sup>とあるように、九莉はふたりを愛していたが、愛に応えてもらえない辛さを感じていた。さらに、父と弟への冷たい視線の描写もあり、九莉を監禁した父に至っては、これまで愛したことがないから傷つかないとさえ思う。要するに、九莉は両親、弟、「夫」と良好な人間関係が築けなかった。そのため、普通とは異なる感受性をもつ「型にはまらない」「同情されない性格」が形成される一要因となったと推察できよう。

### 3.2 ひたすら待つことの恐怖

九莉は、事実婚の「夫」の邵之雍を待ちきれず、苦しんだ末に自ら諦めてさよならを告げて去り、恋人の燕山からは連絡をずっと待っていたが、彼と会えたのは彼が雪艶秋と結婚した後であった。どんなに愛しても、女性からはプロポーズができないし、ひたすら待ち続けるのは前近代に多く見られた姿だが、九莉の内気すぎる性格、女性らしさが影響していると言えるのかもしれない。良家の奥ゆかしい女性は、男性が女性の心の想いを真摯に受け止めて応えてくれる機会を、切ない思いで待ち続けるが、限界がある。精神が限界を超えると、自ら相手との関係を断つ潔さを九莉はもつ。

燕山とは、「今年また君に会えるよね？」と電話で話してから、再会まで1年以上かかった。年が明けたら会えると思っていたが、一年会えず、再会した時はすでに、彼が雪艶秋と結婚した後であった。待ちぼうけの末に、九莉は振られてしまいショックを受けた。

それと共に、九莉はよく夢を見るのだが、試験の夢、それは悪夢であった。彼女は来年もし良い成績が維持できれば全額免除の奨学金を受け取れるし、将来オックスフォード大学の大学院へ進めると大学が口頭で同意していたので大きなプレッシャーがあったのである。つまり「人生の試験の隠喩」<sup>46)</sup>の意味が含まれていた。彼女は軍隊の作戦前の黎明になぞらえる。「すべての戦争映画で一番恐ろしい一幕だ。だって完全に待つことだから」。戦争中に会った恋愛と戦争、そして度々言及される試験には、成り

41) 張愛玲前掲書『小團圓』, p184.

42) 宋以朗「<小團圓>前言」張愛玲前掲書『小團圓』, p13.

43) 張愛玲前掲書『小團圓』, p276.

44) 張愛玲前掲書『小團圓』, p78, p237.

45) 張愛玲前掲書『小團圓』, p276.

46) 刘锋杰主编前掲書「书里书外: 重重叠叠的对照记」『小团圆的前世今生』, p44.

行きが予想できないもの、自分の力ではどうしようもなく、相手とのプロセスで結果が変化するものという共通点がある。九莉にとって、ひたすら待つこと、待たされることはストレスになり、恐怖を感じ耐え難い。

次に張愛玲の他の文章や関連資料を参照して、九莉と張愛玲の恋愛と結婚を比べてみる。

## V 『小團圓』の九莉と張愛玲の恋愛・結婚

### 1 恋愛と結婚

九莉と邵之雍が出会った場所は、『小團圓』の中では、九莉が同居している楚娣の家と推測され、胡蘭成は『今生今世』では胡の上海の家と書き、経緯にも相違が見られる。胡蘭成によると、すでに監獄に入っていて、出獄後、上海に行き、蘇青に張愛玲の住所を聞いて訪ねたが、会ってもらえず、メモを渡して帰った。後日、張愛玲から電話があり、彼女が胡蘭成の家に行って会ったと書く<sup>47)</sup>。

『小團圓』では、汪精衛政府のある人物（邵之雍）が、雑誌に書評を書いて九莉の小説を褒めてくれた。だが、昨日編集者から手紙が来て、その人が監獄に入ってしまったと、九莉が親友の比比に話していた。九莉がその書評が掲載されなくなるのを心配していたところ、荒木が留置所にピストルをもって入り、邵之雍を救い出した。その後、邵之雍が文姫に住所を聞いて、九莉の住んでいた楚娣のアパートを訪ねて来たように書かれている<sup>48)</sup>。また、『小團圓』ではふたりが結婚証明書作成時の証人はいなかったが、現実では親友の炎櫻 Fatima がいた<sup>49)</sup>。九莉（張愛玲）が邵之雍（胡蘭成）に送金して一方的に別れを告げたのは、小説も現実も同じである。

九莉は紹介結婚に反対で、映画のような恋愛にあこがれていて、邵之雍と恋愛したが妻子ある邵之雍の離婚を待ってから、法的に正式でない結婚の事実婚をした。張愛玲は1944年の2月に胡蘭成と出会い、5月26日に胡蘭成が應瑛娣との離婚広告を〈申報〉に発表した後<sup>50)</sup>、ふたりは夏に「結婚」した事実と重なる。24歳の時である。当時は「15歳で婚約、20歳で結婚」が通例であったので、張愛玲が24歳で「結婚」するのは晩婚といえよう<sup>51)</sup>。

彼女は同年春に発表した散文「談女人」で「大多数の女性にとって『愛』の意味はつまり『愛されること』である」「男性だけが求婚する権利がある」「現代の結婚はある種の保険であり、女性が発明したものだ。」「なぜなら男性はみな「心がけが悪い」もので、恋愛をするのは固より危険である以上、結婚とて危険である。結婚は恋愛の墓場なので——」<sup>52)</sup>と述べる。小説では、少女らしい恋愛への憧憬があっ

47) 胡蘭成「張愛玲記」「民國女子」『今生今世』遠景出版、2004年10月、p272—274。

48) 張愛玲前掲書『小團圓』、p163。

49) 胡蘭成前掲書「張愛玲記」「民國女子」『今生今世』、p286。

50) 張惠苑編『張愛玲年譜』天津人民出版社、2014年1月、p49。

51) 関西中国女性史研究会編『中国女性史入門—女たちの今と昔』人文書院、2005年3月初版、2007年5月、p38。

52) 張愛玲「談女人」初出『天地』第6期、1944年3月。／『張愛玲典藏全集8〔散文卷一〕1939年—47年作品』皇冠文化出版、2001年4月、p102—105。

たが、散文では冷静な達観した見方で、男性への不信に満ち溢れた女性の不安と失望が見えている。

張愛玲はさらに1944年5月に発表した「自己的文章」で「同棲する女性は、彼女たちのもとの地位が男性より少し低い、でも多くは生き生きとした生命力に溢れている。—（略）—彼女たちははかりごとをして、恋のさや当てで焼きもちを焼いて喧嘩をするが、野蛮になるが、ヒステリーは起こさない。彼女たちに、物足りないことがひとつある：つまり彼女たちの地位が終始不安定であることだ。猜疑心と危機感を抱き、彼女たちはだんだんとわがままに変わる。この種の同棲生活は中国では外国よりも多いが、まだ中国人が真面目に取り上げて書いたことがない」<sup>53)</sup>と述べる。結果的には正式な夫婦とはならなかったが、九莉は、「けじめとしての結婚」の事実婚をしたかったのであり、同棲を選択したのではない。

愛人や妾になることには抵抗していたのである。法的に無効であるが、自分で納得するけじめとしての1枚の結婚証明書であった。もしきちんと正式に結婚したいのならば、疲れていても結婚証明書をもう1枚買いに行っただろうし、証人を頼むこともしたであろう。「夫」に複数の女性が出現しても、喧嘩をせず、野蛮にもならず、表面は冷静を装って、愛の喪失を自覚して、深く傷ついて自ら去った。周囲は愛人か妾か正妻か……など、とやかく言って騒いでいたかもしれない。だが、九莉は、女性としてのプライドを持ち、妻妾同居や同棲の多い中国の旧社会の伝統に埋没しないで、周囲に迎合しない、型にはまらない「通い婚」で事実婚の結婚形態をとった。現実の張愛玲は、証人（Fatima）を立て結婚証明書を作成し、結婚した。胡蘭成は「私たちは結婚したけれども、まだ結婚していないみたいでもある」と『今生今世』で述べる<sup>54)</sup>。胡蘭成38歳、張愛玲23歳の時であったという。

九莉は「一夫一婦制を深く信じていないが、（三美団円は）ただ耐えられないとわかっている」<sup>55)</sup>と感じていて、邵之雍に「一对一の相思相愛関係」を望んだが裏切られて、自ら去る。「三美団円」は、妻と夫、愛人或いは妾の三者が円満に仲良く共存共栄することを意味し、ここでは、九莉と邵之雍と小康小姐を指す。張愛玲は、1945年発表の散文「雙聲」で、「中国の多妻主義はどうなるの?」について「理論上は賛成であるが、実行できない」<sup>56)</sup>という。中国旧社会の「一夫一婦多妾制」と、近代の「一夫一婦制」の両方に対して、九莉も張愛玲も温度差があるものの、懐疑を感じているのであろう。男女の愛を重視するあまり結婚制度に縛られたくないこと、心の愛を重視しているが、同時に複数を楽しむのは現実には難しいことを言っているのであろう。本当はひとりしか愛せないのに、同時に複数の相手を持つ中国男性が多かった時代だ。

張愛玲は、1954、55年頃、香港のUSIAの同僚であった鄭文美に「私の愛は自然消滅しても人を長々

53) 張愛玲「自己的文章」初出『新東方』第9巻第4期、第5期合刊。1944年5月。／前掲書『張愛玲典藏全集8〔散文卷一〕1939年—47年作品』、p93—94。

54) 胡蘭成前掲書『今生今世』、p286。

55) 張愛玲前掲書『小團圓』、p277。

56) 張愛玲「雙聲」初出『天地』第18期、1945年3月。／前掲書『張愛玲典藏全集8〔散文卷一〕1939年—47年作品』、p253。



と苦しめるものです<sup>57)</sup>と語っていた。この思いは、九莉が邵之雍との破局と、燕山に待たされて辛かった時期の追憶に重ねることができよう。

米国人の夫とは、婚前にできた子どもを墮胎してから、結婚したことは小説も現実も同じである。ただし、墮胎することは、小説内では、夫ではなくて九莉が望んだことであり、司馬新によれば、Reyherが望んだことになっている<sup>58)</sup>。その時期のReyherの日記が存在せず、以前の研究は夫の意志による墮胎説が一般的であって、真実是不明であるが、女性の意志であるというのは新説であろう。

このように九莉は、張愛玲の散文と生き方に重なる部分と異なる部分があることがわかった。『小團圓』が出版されるまでは、張愛玲のイメージは、毅然と美しく、はっきりと意志表示をする都会の素敵な知的な女性であった。しかし、「自伝的小説」『小團圓』の九莉を見ると、そのイメージは覆される。九莉は、男性と時代に振り回されて、塗炭の苦しみを味わい、辛酸を嘗め、内気で反抗できない口下手な、悲しみを心の奥底に隠しながら、逃げるように次の人生の扉を開けていく女性であることが判明した。

おそらく、張愛玲の散文が建前・理論であり、『小團圓』の九莉が本音・現実なのであろう。小説の九莉は、男性に翻弄されている純粋で苦悩する少女の発言だが、散文の張愛玲は大人の女性の明確な断定口調のようだ。張愛玲と九莉では、イメージが異なり、知的で明晰で毅然とした外面（張愛玲）と翻弄されて苦悩するか弱て純粋な少女の内面（九莉）のギャップが大きいのである。小説『小團圓』の九莉の心の動きを追ってみるとその言動から、これまでの張愛玲像が変わり、新たな張愛玲像を組みなおす必要があるかもしれない。

『小團圓』の九莉の生き方と散文内容と現実の張愛玲の関係は、さらに相違点を詳細に比較探求することができよう。

## 2 宗族家父長制と儒教思想と核家族

父権と家長権が強大であった中国旧社会は、家父長制と儒教思想に支えられている。例えば、「女子の貞操」<sup>59)</sup>、「二夫にまみえず」、「女子は才なきが即ち徳である」「男子の跡取り重視」「多子多福」（男の子が多ければ多いほど良い）、「三従」（婚前は父に従い、結婚後は夫に従い、夫亡き後は息子に従う）、「七去」（夫が妻を離縁できる7つの条件のひとつに男の子を産まないことがある）という言葉が挙げられよう。「老後の扶養や死後の祭りなど、家の安泰と繁栄のために、まずは男児を授かる必要があった」<sup>60)</sup>。

前近代の旧社会では、結婚しただけでは家族の形成と見なされず、子どもが生まれて初めて家族が形成されたと考えられていた<sup>61)</sup>。

これらを九莉と張愛玲に当てはめて考えてみる。九莉は、付き合った邵之雍、燕山、汝狄ともすべて

57) 張愛玲「雜録」「張愛玲語録」張愛玲・宋淇・宋鄭文美著 宋以朗主編『張愛玲私語録』皇冠文化出版、2010年7月、p121。

58) 司馬新『張愛玲與賴雅』大地出版社、1996年6月、p108。

59) 毛秀月『女性文化閑談』团结出版社、2000年1月、p126。

60) 前掲書『中国女性史入門——女たちの今と昔』、p22。

61) 野々山久也編『論点ハンドブック 家族社会学』世界思想社、2009年3月、p125。

恋愛すると自然に婚前交渉をする。特に、邵之雍（羌族・胡蘭成）は、中国文化では貞操が重要なことを理解しているにもかかわらず、男性中心主義で多妻主義を標榜し、彼女に不誠実であった。九莉（張愛玲）は、愛してくれなくなった相手邵之雍（胡蘭成）には、耐えられなくなったら女性から相手に見切りをつけて事実婚の解消をし、汝狄（Reyher）との間にでき婚前に墮胎した子は男の子であった。「夫」の意見よりも自らの意志を尊重し、子どものない家庭を汝狄（Reyher）と築く。そして英語に堪能で香港の大学に通い、上海で小説を書くという教養と才能を持つ女性であった。

九莉と張愛玲の生き方が、宗族家父長制と儒教思想とは正反対で、それらを否定か抵抗しているようである。

張愛玲は、1944年に「造人」<sup>62)</sup>という散文に書いている。「人を作るのは危険な仕事だ」「なんと不幸な種子、恨みと憎しみの種子だろう」<sup>63)</sup>。この散文から張愛玲が、子どもの出生、人間の生命の継続を否定しているように感じる。張愛玲にとって跡継ぎがないのは最大の不幸ではなく、最高の理想なのであろう。まず、子どもを中絶までして、相手と結婚する九莉は、子どもを持って初めて家族の成員として認められた前近代家族への抵抗であり、米国で流行していた女性解放運動の産児制限の影響と<sup>64)</sup>、母に替わって子供に復讐するのを恐れる心理が根底にあらう<sup>65)</sup>。『小團圓』では大家族の中で九莉の母蕊秋が幼少期に九莉の育児を乳母任せにし、外国へ行ってしまう、帰国後は父乃徳と離婚し、それから国内外で多くの外国人ボーイフレンドと交際し、最期は客死した。多くの研究者が、幼少期に関する散文資料などから張愛玲の母と張愛玲との緊張した関係と母子関係の失敗を指摘している。

父盛乃徳は離婚協議書を作成して、その文面の中に、九莉の外国留学を明記したにも関わらず、費用を出さず、とどのつまり、暴力を振るい九莉を監禁した。父乃徳との関係は母蕊秋以上に最悪の状態であったことは、伝記の事実とも重なる。

九莉は汝狄と、子どものない夫婦を形成しているのである。だが、九莉は、結末の夢に邵之雍の子どもがたくさん出現することから、実は潜在意識では近代核家族を理想としていたことが判明している。

恋愛結婚をして、成功を収めて一児がいる幸福な郁先生の例がある。郁先生夫妻は、空襲警報で非難中に知り合って結婚し、5、6歳の娘がひとりいる。「ロマンチック」と九莉は彼を称し、「何の成功もないが結婚だけは良かった」と彼は述べる。郁先生は邵之雍の田舎への逃亡を手助けし、上海にいる九莉と彼との橋渡しをする人物である。他に邵之雍の命を助けた日本人荒木にも好意的な描写をしている。一目ぼれで知り合い、愛ある結婚をして、子どもに恵まれて自他ともに幸福を感じている郁先生の確かな存在感があり、ましてや、子どもが女の子であるところに先進的でユニークな近代核家族の理想の一つの形があると考えられる。

小説の九莉は子どものない夫婦のみで、夢では子だくさんの近代核家族、張愛玲自身は夫婦だけの生

62) 張愛玲「造人」初出『天地』月刊第7—8合刊 1944年5月。／前掲書『張愛玲典藏全集8 [散文卷一] 1939年—47年作品』, p159—160。

63) 同上。

64) 野々山久也編前掲書『論点ハンドブック 家族社会学』, p173。

65) 張愛玲前掲書『小團圓』, p324—325。

活である。このように九莉の恋愛と結婚に関する言動は、あたかも中国旧社会を代表する宗族家父長制と儒教文化を否定しているかのように見え、近代的先進的であって、ある意味では時代と文化を超越した個性的な観念があるといえよう。

### 3 九莉と張愛玲のアイデンティティ

「九莉はたまに思った。これはすべて夢を見ているのではないかと。突然目覚めると、自分がもうひとりの人間であることを発見する。もしかしたら、公園の池に放たれた帆掛け船の外国の子どものようだ」。Washingtonの奥まった寂しい街で、淡いブラウン色のおかっぱ頭をした女の子が小さな鉄製の門をよじ登ったり下りたりしているのを見、それが彼女自身だと気づき、自分はいつも「外国人」だと思っていた——中国にいる外国人——隔離されていたので——と悟る場面がある<sup>66)</sup>。

これは、九莉が中国でも米国でも、アイデンティティが不安定で落ち着くところがなかった精神状態を表しているのではないかと推察される。鉄製の門は、父に監禁された時の自宅の門であろう。

Washingtonは、張愛玲が実際、香港へ出稼ぎに行った後に戻った、病気の米国人の夫Reyherの住む街であった。しかし、米国とて、多言語多文化多民族の国で、それぞれの素材が独立してサラダボールのようである。中国の伝統文化に馴染めず、亡命移民した米国にも、安定した根を下ろすことができなかった苦悩が投影されているのではなかろうか。

九莉も張愛玲も、ふたりのアイデンティティは、中国では、中国にいる外国人のようで、渡米後は米国にいる外国人のようであって、どこの居住国にいても安定せず疎外されて、その国と文化に浸りきれない、越境者、漂泊者であった心理が投影されているのではなかろうか。中国でも米国でも異文化における異邦人のように「隔離」された感覚、疎外感を感じていたのであろう。

### 4 「アフタヌーン・ティー」人生の午後の課題と張愛玲

九莉の母蕊秋は、夫乃徳と離婚後に「午後のお茶」と称して、多くの外国人と恋愛を享受し「流浪のユダヤ人」の生活を送っていた。この「アフタヌーン・ティー」には、どんな意味が込められているのだろうか。結婚に失敗した女性の「復讐」と捉える九莉の考えもあるが、ユングの心理学から見れば、以前の人生で価値があると考えられていた理想とは反対の価値を悟ることであり<sup>67)</sup>、「新しい人生」「再出発」への願いが込められているのではないかと思われる。

「旧式結婚」に失敗した蕊秋の生き方から、旧思想の源である儒教思想批判をし、心理学の面から言えば「人間性の解放」や、「中年・老年の心理」を追求した結果であろう。蕊秋は、本能的に多くの奔放的な恋愛を経験しながら、異性と心を通わせ、人生を総括しようとしたのではなかろうか。九莉の母は「自分固有の“物語”を発見する」ために、無意識のうちに人間性の赴くままに、「人生の午後」の

66) 張愛玲前掲書『小團圓』、P219。

67) 渡辺雄三『夢が語るころの深み—心理療法と超越性』岩波書店、2006年11月、p191。

課題に取り組んでいたのかもしれない<sup>68)</sup>。母の恋愛と生き方は、九莉と対照的な箇所が多いが、「人生の午後」の課題に取り組む姿は、張愛玲が「自伝的小説」を55歳で書いたということにあてはめられるであろう。

張愛玲は人生について言う。「人はだんだんと成熟して、内心にある種の平和が訪れるのは、以前わからなかったことだ」「人は歳をとると、多くの不愉快な記憶（苦々しい思い出）と折り合ってきたことを理解し、平静な心境が、あまりかき乱されないようになる」あまり悩まない<sup>69)</sup>。

「人生に『なぜ』と尋ねる必要はない！生きるのに目標があるとは限らない」<sup>70)</sup>という。張愛玲は人生に目標があるとは限らず、愛にも目標がないと考える自然体である。九莉は「かけがえのない自分の生きた人生の物語」を振り返るにあたり、「愛されれば」と純愛を信じて相手と関わった結果、男女の愛はすれ違うことを身をもって学習させられた。自分の思い描いていた理想の恋愛と現実の恋愛はギャップが大きすぎ、相手ばかりでなく、自分も含めて双方の人間が修羅場で見せる人間の醜さに気づかされ幻滅してしまう。だが、人生はひとりでは生きられず、相手と環境に合わせて、軌道修正を図りながら歩まねばならず、それこそが、矛盾したものが混在するのが人生であり、愛であると悟られるようである。

## 5 愛の幻滅・絶望後に残るもの

果たして、張愛玲が1976年4月22日の書簡に「これは情に溢れた物語です。私は愛情の千変万化する様を、完全に幻滅した後ですら何かが残っていることを、描きたいと思います。私の今の感想はこの物語のようではないけれども」<sup>71)</sup>と述べている。これは何を意味するのであろうか。

鄭文美には「たとえその時、苦痛を感じても、私は少しも後悔しない。——私がある人を好きになったら、私にはその人が永遠に素晴らしいと思っているの」<sup>72)</sup>という愛の信念を表した。

艱難辛苦の人生を経験した後に残るものは、男性を愛したこと、「人を愛した記憶」、愛した人がかけがえのない永遠の宝物であったということであろう。そして、30年の歳月を経た1975年頃の気持ちがこの物語のようではないと言うことは、「自伝的小説」『小團圓』の邵之雍、燕山、汝狄への愛情描写は小説内のものであって、現実の胡蘭成、桑弧、Reyherへの愛の思いはまた別で違うものということである。

『小團圓』の結末で示される、「10年前の人」は、1967年に亡くなった11年の結婚生活を送ったReyherのことを指すと推測できよう。激しかった愛の感情は歳月により変化する。現代はパソコン機能になぞらえて、男性にとっての愛は「別名保存」、女性にとっての愛は「上書き保存」とは言われるが、張愛玲にとっては、人生のそれぞれの時期に、巡り合った男性たちとの愛が確かな追憶なので

68) 渡辺雄三前掲書『夢が語るころの深み—心理療法と超越性』, p161.

69) 前掲書「人生」『張愛玲私語録』, p103.

70) 前掲書「人生」『張愛玲私語録』, p105.

71) 宋以朗「<小團圓>前言」張愛玲前掲書『小團圓』, p10.

72) 前掲書「雑録」『張愛玲私語録』, p120.

あろう。中国にいた時に本当に愛していたのは、邵之雍（胡蘭成）であり、燕山（桑孤）とは「初恋の埋め合わせ」、米国では汝狄（Reyher）が愛の証として存在し、恋愛の理想は叶えられていたと考えられようか。

小説では明記されていないが、「幻滅した後に残った何か」は、張愛玲が米国で再婚した相手、「汝狄（Reyher）との愛の記憶」、「心の愛の証」であって、彼こそが、彼女の人生を静かな強い愛で包んで支えていたと推察できよう。

米国は、自由恋愛社会で、張愛玲は亡命移民後まもなく再婚相手を見つけることができた。彼 Reyher が病気持ちで、経済的に欠けていたが、張愛玲は The MacDowell Colony で一目ぼれの出会いがあり、11年の結婚生活を送った。中国大陸で実際に愛に裏切られ、愛に失望し幻滅してきた張愛玲にとって、米国は人生再起の場所であった。中国人にプライバシーがないため、特に晩年、華人社会を避けた隠遁生活を送り、周囲には「気楽な隠居」と誤解されていた。中国とも距離をおいていたのである<sup>73)</sup>。実は、彼女は、隠居ではなく孤独ではなく、プライドを持って執筆に専心し自己満足で幸福な生活を送っていた。しいていえば、自分で選び取った孤独で静かな日常の米国での晩年であったと言えよう。

Reyher との生活は介護や経済苦があったけれども、それから解放された時に、彼と暮らした11年間で愛に満ち溢れたものとして、また「永遠の愛の魂」として、彼女の心に深く刻まれていた可能性がある。米国で Reyher を天国に見送った後、新たに伴侶を求めて行動する気持ちは持たず、執筆活動に専念している。彼女は普通の在米華人と異なり、生涯、夫亡き後も28年間夫の姓を名乗っていた<sup>74)</sup>。

米国の実生活も中国同様に波乱万丈で非常に厳しかったが、「愛さえあれば」「愛こそすべて」は達成できていたのである。張愛玲は Reyher と相思相愛で「一对一の近代恋愛と結婚」の理想は実現されていたと考えられよう。自身の愛のプライバシーを決して語らなかつた張愛玲のいわば沈黙の愛は、夫亡き後の晩年、Reyher への感謝の愛であったと推測している。張愛玲は「愛さえあれば」の信念を貫いて、人生を全うしたのであろう。

## VI おわりに

渡米後、彼女は多くの作品を英語で書いていたが『小團圓』は中国語で書かれた。これまでの人生で、マスコミを通して、知人他人を問わず、中傷を含めて、様々に噂されてきた人生の真実を自ら語りたという強い気持ちを土台に、小説として脚色したのであろう。

張愛玲は、1976年に、米国での生き方が一段落してから、ひとりで自立して生きる決意をした頃、

<sup>73)</sup> 拙稿「張愛玲書簡に見る米国での生活実態とその人生観—1963年から1995年までを中心に」『研究紀要』第66号、2011年1月、日本大学経済学部、p100—101。

<sup>74)</sup> 初出1995年9月10日台北《聯合報》副刊／苏伟贞「张爱玲书信选读」『回望张爱玲·昨夜月色』文化藝術出版社、2003年1月、p432。

在米苦節 20 年に『小團圓』を集中して書き上げた。55 歳は正に「人生の午後」の課題に取り組むのにふさわしい時期であった。「自伝的小説」を書く意欲が、中国人として衝撃的な刺激に満ちた小説内容に表れている。自由な異性交際と性解放の関連描写に米国生活の影響が出ていると思われる。張愛玲が 1970 年代半ばに、しかも中国語圏向けに、中国の読者を対象に、このような奇抜な刺激的な特徴を持つ小説を書いたことに大きな意義があると思う。

奥ゆかしく内気な受け身の女性が初恋をし、「通い婚」の事実婚をしたが、「夫」に翻弄され、愛の理想に裏切られ幻滅して、「初恋の埋め合わせ」を経験した後、米国で、子どもを持たない熟年夫婦にたどり着くが、深層心理で夢の理想は「一対一の相思相愛」の複数の子を持つ近代核家族にあったということであろう。

その原因は、中国旧社会の伝統の宗族家父長制と儒教思想の存在、そして男性中心主義で重婚主義者の「夫」を受け入れられなかったこと、幼少期に家族愛、特に父よりも母からの愛に恵まれなかったことにあるであろう。九莉は、自分と相手を取り巻く環境の変化に逐次対応しながら、苦悩して逃げるように次の生き方に歩を進める。

張愛玲は、愛を求めながらも裏切られ「型にはまらない」「同情されない性格」と独特の恋愛・結婚観を形成した九莉を冷静な眼で観察して、彼女の清濁併せのむ言動を正直に描写している。生育期に愛されたいと思った人たちに愛されなかった「心の傷」が、その人の性格と恋愛、更には人生に大きな影響を与えているとも言えよう。そもそも思い通りにいかないのが恋愛であり、人生である様子が詳細に描かれている。

抑圧され翻弄され模索しながら必死に生きる九莉の姿は、中国の宗族家父長制、儒教思想、男性中心主義社会と多妻主義者への懐疑と抵抗であろう。それらは、すれ違う男女の愛情、愛の理想と幻滅、夢の理想と現実との相違が、中国と米国において、前近代と近代の考え方が九莉の中に同時に混沌と共存する恋愛と結婚観であろう。

『小團圓』は純粋な文学少女であった九莉が、男性たちと戦争の混乱した時代に翻弄された愛情至上主義で「愛さえあれば」と必死にもがいて生き抜く「愛の闘争の物語」である。

結末で示された邵之雍に対する美しい追憶は、30 年後の今 1976 年となっては別の思いがあるという現実を突きつけた。果たして、当時の愛は、30 年の歳月を経て、どのように変化したのであろうか。過去の愛が風化して無関心になったのか、あるいは憎しみが強まったのかと想像されるが、筆者は、米国人の夫 Reyher との強い愛が、張愛玲の晩年を支えていたと推察する。たとえ諦観と幻滅に満ち溢れていても、人を愛した「心の愛の証」が、心の愛の宝物が九莉と張愛玲の心底に、「10 年前の人」として深く刻まれて存在していた。たとえば、英語で執筆して身を立てる米国の夢が崩れ去っても、張愛玲は決して中国に戻ろうとはせず、Reyher との愛の記憶を宝物として心に秘めながら生き続けた。

格差社会の米国で苦勞し過ぎ、周囲に「気楽な隠居生活」を送っていると誤解されるほど、人を避けて疎外された生活を送っていた張愛玲の現実と究極の理想が、「愛さえあれば」という愛情至上主義の恋愛・結婚観として、『小團圓』の九莉と汝狄の子どもを持たない熟年夫婦の姿（現実）と、夢の中の

子だくさんの邵之雍との若夫婦の核家族の姿（夢の理想）に、象徴されていたと考える。

そして、『小團圓』の九莉の悩み揺れ動く言動は本音・現実であり、張愛玲の散文が建前・理論であったことが、小説と散文を比較してわかってきた。このことにより、従来の毅然とした明晰な個性が強い張愛玲のイメージは外面であって、実際には、かなり内気で奥ゆかしく翻弄され苦悩が絶えず待つ身の九莉が内面の姿であり、外と内のギャップが大きいことが判明した。張愛玲のイメージの変更が求められよう。

『小團圓』はヒロイン九莉だけに代表されているのではなく「多角恋愛の物語」なので、他の人物の恋愛と結婚も探求する必要があるだろう。九莉を満身創痍に至らしめた近親者の生き方を今後の課題としたい。

[本論は 2013 年度特別研究員の成果の一部です]